老健における音楽療法に関する研究　第22報

～認知症高齢者を対象とした集団音楽療法のチームづくり～

今村 優子[1)]　河野 小雪紀[1)]　塩谷 将彦[2)]　滝原 典子[3)]　美原 淑子[1)]
美原 恵里[4)]

1)公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 音楽療法士

2)公益財団法人脳血管研究所 法人本部 システム管理課

3)公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 看護介護部

4)公益財団法人脳血管研究所 介護老人保健施設アルボース 施設長

[はじめに]当施設の一般療養棟での音楽療法は音楽療法士と多職種のメンバーで構成される音楽療法チームにより集団セッションの形式で実施し、クライアントの他者との交流が活性化され、意欲の向上も認められたことを報告している(砂永ら、2012)。一方、認知症専門棟では小集団(8名程度)の形式で行うことが多かったが、認知症を有する利用者の音楽療法への参加ニーズも大きくなってきた。そこで今回、一般療養棟の集団音楽療法を参考に、認知症高齢者に対する大集団(20名以上)セッションのための音楽療法チームづくりを行ったので報告する。

[取組み]平成31年3月～4月の期間に勤務している認知症専門棟看護・介護スタッフ(専門棟スタッフ)18名を対象に以下の(1)～(4)の取組みを行った。(1)音楽療法士と専門棟スタッフと情報共有、連携を深めるため、専門棟スタッフから音楽療法担当スタッフ(MTスタッフ)2名を選出した。(2)一般療養棟の看護・介護スタッフが、MTスタッフと専門棟スタッフに対し集団音楽療法でチームの一員として取組みについて経験を基に紹介した。(3)音楽療法士が、MTスタッフと専門棟スタッフに対し音楽療法の定義や目的、効果について説明した。(4) 認知症専門棟で音楽療法士、MTスタッフ、専門棟スタッフの協働による音楽療法を実施した。利用者25～30名を対象とし、棟内食堂で、毎週1回、30～60分間、プログラムは季節の歌やなじみの歌を取り入れた歌唱活動、好きな楽器を選んでもらって行う楽器演奏、ピアノに合わせたリズム活動などで構成した。セッション終了後、音楽療法士、MTスタッフはセッションについて振り返りを行った。

[調査方法]取組み前、上記(3)の後、上記(4)の後、MTスタッフと専門棟スタッフに対し、音楽療法に関する10項目について「とても思う」(評価5)～「思わない」(評価1)の5段階での回答を求めるアンケート調査を実施した。また、(4)の後MTスタッフに対し

て「MTスタッフ自身の意識変化」、設問2「チーム全体の意識変化」について聞き取りをした。なお、本研究は脳血管研究所倫理委員会で承認を受け実施した。

[結果]アンケート調査では、「音楽療法に関わりたいと思いますか」の質問に対し、評価5と評価4は、取組み前5名、(3)の後6名、(4)の後10名と漸増した。評価3はそれぞれ12名、10名、5名と漸減した。「セッション中、利用者の観察をしていますか」の質問に対し、評価5と評価4は、取組み前11名、(3)の後15名、(4)の後18名と漸増した。「セッション中、状況に合わせて何か工夫していますか」の質問に対し、評価5と評価4は、取組み前4名、(3)の後9名、(4)の後16名と増加した。

聞き取り調査では、設問1に対して「他のスタッフへ音楽療法を発信する立場という意識をもった」「利用者が落ち着いて参加できるようになった」という意見があがった。設問2に対しては「今日音楽療法あるよね、とスタッフ間で声を掛け合う場面がある」があがった。一方で「音楽療法に関わるために時間が拘束される」といった意見もあった。

[考察]アンケート調査では、専門棟スタッフの音楽療法への関心、意識の向上が認められた。これは、取組み前に音楽療法士と認知症専門棟スタッフ間で音楽療法に対する認識が異なっていたが、音楽療法士が音楽療法について説明したり、一般療養棟スタッフがそれまでの音楽療法の経験を伝えたりしたことにより、音楽療法に対する理解が深まり、共通認識を持つようになったためと思われる。また、「セッション中、状況に合わせて何か工夫していますか」の質問で大きく増加したのは、スタッフが積極的に音楽療法に係わり、状況に合わせた工夫が可能となったように思われる。

聞き取り調査からは、MTスタッフが音楽療法チームの一員としての当事者意識をもって活動するようになり、実際のセッションの場面においてもクライエントの様子を観察し、的確な対応がとれるようになったことが伺える。このようなMTスタッフの発言は、セッション終了後、音楽療法士とともに音楽療法チームとして振り返りを実施したことが大きく寄与しているように感じられる。一方で、設問2より、時間が拘束されると感じたという意見があがったことは、約2ヵ月と短い介入期間の中でチームづくりを行ったことと、チームとして実践するという新たな取組みのため混乱があった可能性がある。

以上のことから、説明と実践、振り返りを行ったことで、音楽療法士とMTスタッフとが音楽療法に対する共通認識を持ち、MTスタッフが音楽療法チームの一員として機能するようになったと考えられる。さらに、MTスタッフが専門棟スタッフを巻き込んで

当該療養棟に音楽療法を根付かせる雰囲気を醸成し、その結果、利用者一人ひとりに気配りが行き届いた音楽療法を提供できるようになったと思われた。

[まとめ]認知症高齢者を対象とした集団音楽療法のチームづくりについて報告した。音楽療法の説明やセッションの実践と振り返りは、現場スタッフ全員の音楽療法に対する意識の向上に繋がった。音楽療法チームの一員として現場スタッフから選出したスタッフは、音楽療法に対して音楽療法士と共通の認識を持ち、情報を共有し、当該療養棟の看護・介護スタッフの音楽療法に対する理解を深めた。このことにより利用者一人ひとりに気配りが行き届いた音楽療法を提供することができた。老健において音楽療法をチームとして実施するためには、そして、音楽療法士と現場スタッフを結びつけるためには、音楽療法をよく理解している看護・介護スタッフの育成が有用と思われる。一方、現場スタッフからの時間が拘束されるとの意見については、今後の課題として検討する必要がある。